

研究科長挨拶

市川 伸一

(研究科長・教育心理学コース)

私からは、この科研が日本の教育において、また、本校の教育学研究科においてどのような意味を持っているかをお話します。

日本では、学習指導要領がカリキュラムの大元であるとされてきました。その学習指導要領についても戦後さまざま動きがあり、その時々の特徴があります。今回の科研は、次の学習指導要領に向けての望み、願いを持って始まりました。これまでの教育研究はどちらかというと、今の指導要領では駄目、今の教育は駄目などと批判的な立場が多かったと思いますが、それならば一体どういうものが望ましいか、建設的に打ち出していこうという思いもありました。

その流れは、今の教育界の動きともかなりマッチしているところがあると思います。私たちがテーマとして挙げているのは「社会に生きる学力」です。これは何と対比しているかということ、一つはアカデミズムを中心とした教科の学力です。これだけに凝り固まってしまうと、社会に出てそれがどう生かされるのか、どう役に立つのかあまり見えてこないカリキュラムになってしまいます。ですから、教科、アカデミズムに偏った系統学習だけではまずいのです。

その一方で、逆に、子どもたちの生活に密着した、子どもの興味・関心、生活に沿ったカリキュラムは非常に大事だと言われていますが、これもあまりに偏りすぎると二つの問題が出てきます。一つは、教科の基礎学力が落ちてしまうこと、そしてもう一つは、子どもの生活、興味・関心に沿っているとはいえ、その子どもたちが社会に出たときの生活に必ずしもマッチした教育になっていないかもしれないことです。将来の社会に出ていくことを念頭に置いて、

今の学びを位置付けることまで考えられていなかったのではないのでしょうか。

今回、「社会に生きる」ことを非常に強調しているのは、これまで文部科学省は「生きる力」や「人間力」という言葉を使ってきましたが、もう少し社会に出ていくことを念頭に置いたカリキュラムの設計原理が入ってきてもいいと思っているからです。もちろん教科の学習は大切です。今、各教科ごとに親学問があり、それに結び付くようなしっかりした系統的な学習があります。これは日本の教育の根幹ですが、それだけではなく、社会に出ていくためにはどういう力が必要かという視点を入れたカリキュラムにしてはどうかという発想がありました。

そのために三つのユニットがあります。まず「基幹学習」のユニットです。基幹学習とは従来でも教科の学習、総合的な学習の時間でも行われていたものですが、それが社会に出てからどのように生かされるのかという視点から、「言語力」「数理能力」を特定の教科に任せおくだけではなく、教科横断的に力を育てていこうと。これも今の教育の方向とマッチしていると思います。さらに「学び方の学習」です。各教科をどのように学んでいくのか。よほど丁寧な先生であったり、関心のある子どもでないと、そういうものを身に付けられないまま学校を出ることになってしまうのではないかと。社会に出てからも、改めて学習をする機会はいろいろありますが、そこで学校での学びが生かされないことがあるのではないのでしょうか。「探究学習」についても同様です。

「生き方の学習ユニット」「社会参加の学習ユニット」は、まさに社会に出ていくときに、自分はどのように生きていきたいかを念頭に置いたカリキュラムを作っていけたらという思いでスタートしました。今年で2年目となりますが、今日はこれまでの動きについてたくさん聞けると思います。来年は3年目になるので、先生方

からも多くのご意見、ご批判、ご注文などをいただき、具体的なカリキュラムに結び付けた提案、研究をしていければと思っています。

先ほど南風原先生から、昨日、中釜先生がお亡くなりになったとお話がありました。中釜先生は「生き方の学習ユニット」で心理教育を担当してくださっていました。自分がどう生きていきたいかを考えるときに、キャリア形成・キャリア教育、哲学教育があります。そして、もう一つの柱として心理教育があります。自分の人間関係や心理などを児童・生徒自身が理解し、自分の生活に生かす学習が、例えば道徳教育や総合的な学習の時間、社会科教育に入っていくといいのではないかと、中釜先生は積極的に推進されていました。今回は、特に実践しながらカリキュラムの提案をしていくことが私たちの目標でもあったので、その中で最も実践と密着した形で研究を進めてこられた中釜先生がお亡くなりになったことは、私たちにとっても大変残念です。ほかのメンバーで補い合い、また、皆さんのお力も借りながら、この研究をぜひとも推進していきたいと思います。

今日は最後まで活発なご議論をよろしくお願い致します。